

授業研究の見方・考え方

府中町立府中南小学校 教諭 佐々木 諒

【はじめに】（関係があまりないので読みとばしてください）

私たちが毎日している授業。学校生活の中で授業とは多くの割合を占めています。そのため、教師として「よい授業をしたい」と思うのは至極当然のことです。しかし、その一方で「授業を見る」ということはあまり多くないのではないのでしょうか。それは我々が授業者であり、お互いに同じ時間帯に授業を行っているからです。当たり前ですね。

そんな中、2学期となると研究授業という形で授業を見る機会が増えていきます。授業者は多くの方に見ていただく中で普段あまり感じられないようなプレッシャーや緊張感をもって授業に取り組めます。研究授業の中で一番偉いのは指導講話で来られる指導主事や管理職、授業について話をする参会者ではなく、間違いなく授業者です。その熱意ある授業者に対して、参会者は“ちゃんと”授業を見て、“ちゃんと”授業者・子どもたちに還元すべきだと思います。では、この“ちゃんと”授業を見るとは一体何でしょうか。「そういえば自然とこう見てたな」、「その視点はなかった！！」とみなさんの感を広げたり、再認識したりするものとなっていればうれしいです。

【第1章 授業前】

① 指導案を見る

授業を見るのは何も授業開始から終了までの45分だけではありません。図1にあるように指導案をいただいた時から始まるものです。この指導案をいただくタイミングは研究会や校内研究などによって変わってきます。例えば前日までに事前にいただく場合もあれば、当日いただいて目を通すという場合もあります。それぞれに違ったよさがありますが、図2ではそれぞれのよさをまとめました。

指導案が前日までにある場合はその単元や教科について調べておくことが必要です。なぜなら、語る内容が増えたり、議論がより深まったりするからです。また、自身の実践をふり返ったり、授業者が主張したいことが何かを確認したりすることも必要不可欠です。そして、「自分だったらどう展開するか」という代案をもって授業参観に臨みましょう。授業者と同じ展開だったのなら同じ感覚でうれしく思いますし、違う場合は「そう来たか！！」学ぶことが広がります。いずれにしても自分の考えをもって臨むことが好ましいです。

また、指導案を当日いただく場合もあります。この場合、深く考える時間は正直あまりありません。授業開始までとにかく見るのは授業者の主張・提案とそれに基づく本時の展開です。その中で自分が授業者だとしたらどんな問いを子どもにもたせるか、子どもにどう問うかなどといった授業レベルでイメージすることを心がけることが大切です。

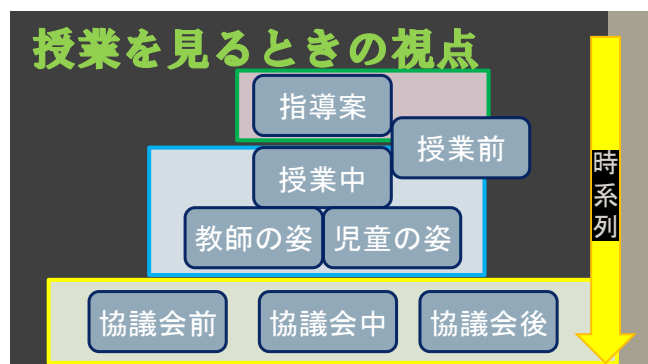


図1：授業の見方

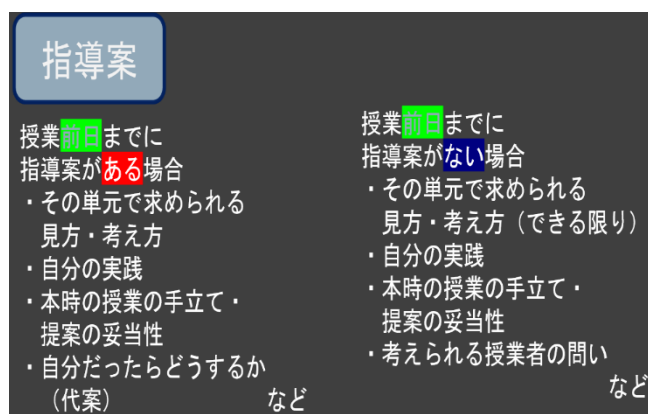
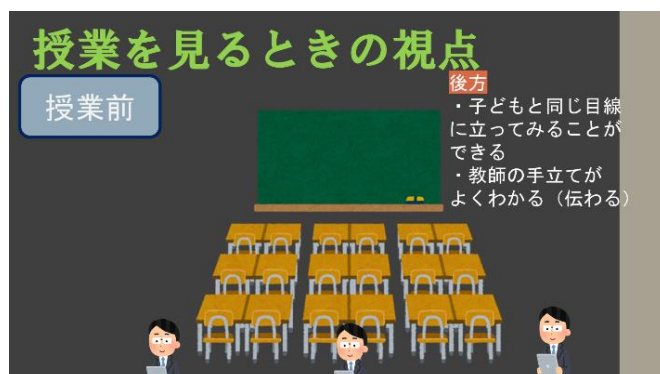


図2：指導案の見方

② 教室の立ち位置

いよいよ授業参観直前です。ここでみなさんに質問です。これから授業参観が始まります。授業会場に行くとなんと一番乗りでした。皆さんはどこで授業を参観しますか。みなさんは授業を見るとき、どのあたりに立って授業を見ていますか。気が付くといつもだいたい同じようなところで見ているではないでしょうか。授業を見る立ち位置も実は大切な授業の見方が備わっています。教室を「前方・真ん中・後方」の3つのタイプにまとめてみました。それぞれにメリットがあると思います。自分の“観”とどこがマッチするか考えながら決めてみるのもよいかもしれませんね。

ちなみに私は教室の前方にすることが多いです。そして、視線は基本的に子どもたちを見ています。理由はその授業で子どもはどんな表情をしているか様子を窺いたいからです。また、授業者と同じ立場で見ようとするのであれば、どう子どもに返していくかを考えるにはやはり子どもの表情をよく見たいからです。



【第2章 授業中】

いよいよ授業開始です。授業者の一挙手一投足を欠かさず見ては記録しているのではないのでしょうか。では、みなさんは何を記録していますか。ここにも授業の見方・考え方の大切な要素が含まれていると思います。私がお世話になっている先生が以前、教師を目指す大学院生を対象にお話されていたことが今も胸に残り、自分の授業を見るときノルマとして掲げていることがあります。それは「授業中に30個の気づきを残しなさい」というものです。1時間の授業は45分なので、30個というと約1分半の間に1つという計算になります。実際にやってみるとなかなか大変です。ですが、ここでの本当の意味は何も数を記録しなさいということではなく、それだけ授業を多面的に見るようにしなさいということです。教師がかけた問いはどうか、問題の見せ方はどうか、子どもはどう反応しているか、子どもが何を言いたそうにしているのか…。この章では、子どもの姿と教師の姿に分けて授業中に記録していること（図3）について述べていきます。

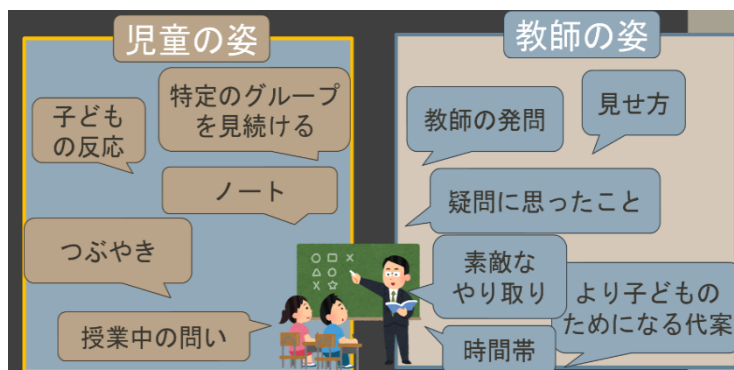


図3：授業を記録する視点

① 児童の姿

まずは目の前にいる児童に対しての記録の取り方です。おそらくみなさんが一番見ている視点ではないでしょうか。

子どもの反応とは、子どもの発言、動き（ジェスチャー）、つぶやき、姿勢などを指します。この子どもの反応を見ていると授業に「前のめりになる瞬間」が必ずあります。その瞬間を教師が見抜けているかどうか、協議会の話題になると思った瞬間を記録します。

また、活動を仕組む手法の一つに「グループ活動」があります。この活動の際、皆さんはどのように記録していますか？いろいろなグループを見て、いろいろなグループで行われている雰囲気を見取ることもありだと思えます。しかし、その一方でグループのやり取りを断片的にしか見ることができないデメリットもあります。そのため、私は一度決めたグループを固定して見るようにしています。もちろん、他のグループの雰囲気を感じにくいのですが、そのグループの学習の過程を見ることができます。学び方がわからなくて路頭に迷っていないか、その時教師はどう支援しているのか、そしてその支援によってグループにどのような効果をもたらしたのかなどといった学びの変容を見取ることができるようになります。校内での授業研究であれば事前に「この班を見ておくね」と打ち合わせができていますね。

子どもたちがいつも書いているノート。授業記録とは少し離れた話になるかもしれませんが、授業者として机間巡視をしている際に、そっとノートを隠すようなしぐさをする子どもを見かけたことがないでしょうか。特に高学年を担当しているとよく見かける光景です。では、子どもはなぜこのような行動をとるのでしょうか。理由は簡単。恥ずかしさや自信のなさの表れです。研究授業など大勢の人に見られているとより一層増します。これは授業者の視点になりますが、それまでに子どもの心を開放できる環境にしたいものです。（私の教室でも子どもたちめっちゃめっちゃ隠します。一緒に引っぱがしていきましょう！！）

45分ある授業の中で子どもたちが考える問いとはいくつあるでしょうか。4年生の算数「面積」L字型の面積を求める授業を例に挙げると、「どんな分け方があるかな？」→「式を見てどうやって考えたと思う？」→「他にもないかな？」→「L字の時は結局どうすれば求められるかな？」といったように問いが変容していくことが考えられます。また、6年生の国語「やまなし」の学習でもそうです。「5月と12月の場面を比べよう」→「どんな色の表現が出てきているかな？」→「色からどんな様子が伝わるかな？」といったように授業には大きなめあてというものがある一方で、子どもが考えている問いは変容しています。今、子どもは何を考えているのか、どんな問いに向かっているのか記録するのも一つの視点です。

② 教師の姿

続いて教師の姿です。目の前で授業を繰り広げている教師のどのようなことを記録していますか。図3では私が思いつく6つの視点を挙げました。

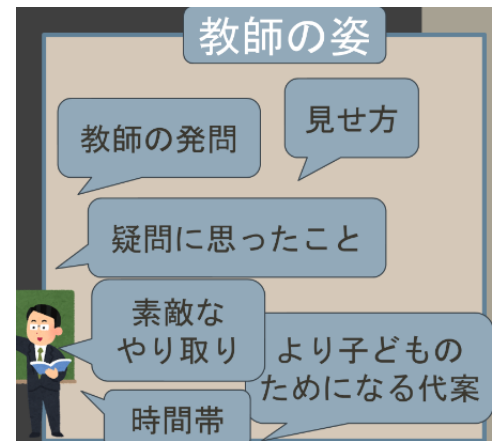
一つ目は**教師の発問**です。教材を見て子どもたちが自ら問いを立てることができるのであれば、それはかなり子どもたちが育っていることを表しますが、いつもそうとは限りません。そこには教師の働きかけが必要です。発問した際の間はどうか、文言はどうだったか、タイミングはいつだったか。授業者の意図をくみ取りながら記録することが大切です。



また、教材の見せ方についても発問と同様に、授業者がこだわって考えた教材との出合わせ方です。この一挙手一投足は授業をするうえで大切な時間だと考えます。

そして、授業を見ながら、より子どものためになる代案を立てています。この代案を考えながら授業を見ることで、協議会へ向けた準備にも取り掛かります。何も「代案が思い浮かばないから言わない」ではなく、授業を見て素直にここが素敵だった、こんなところを真似したいという感想でも大丈夫。協議会の雰囲気を見ながら積極的に発信しましょう。会場で一番偉いのは「授業者」です。この日のために準備をし、何度も何度も

検討を重ねた結果、その授業を迎えています。この後の第3章にまとめているように建設的な協議会を迎えられるように単なる批判ではなく、子どもたちのためによりよい授業となるような代案を立てながら授業を見ることが何よりも大切です。手の内をすべて見せて授業をするわけですから、授業者に還元することが参会者として礼儀であることを忘れてはいけません。



【第3章 協議会】

授業が終わった後には協議会があります。ただ、協議会一つをとっても様々な形があります。ここではまず協議会で参加する立場を知っておきましょう。

- (1) 司会者…その名の通り協議会を進行する司会者です。つついしゃべりたくなりますが、会が進むように全体に話を展開することが大切です。
- (2) 授業者…協議会の初めには授業を終えて話をふられることがほとんどです。そのため、授業の思いややっている上で悩んだこと、協議したいことなどについては事前に話せるようにしておきましょう。
- (3) パネリスト…大きな協議会になると全員で輪になって協議会することができません。参会者を代表して意見を言う立場のことを指します。皆さんを巻き込みながら楽しめるパネリストってなかなか難しいです。

その他に協議会を記録する記録者がいます。基本的には協議会の文字起こしですが、やり取りを丁寧に残しておくことが大切です。

① 協議会前

いよいよ協議会です。協議会に参加する前にできることとして、協議の柱に沿って自分の言いたい意見をもつことです。その意見とは教材に対してなのか、方法に対してなのか、授業展開に対してなのか、子どもとのやり取りなのか、多種多様です。そんな中で大切なのは「自分だったら～～するだろうな」と授業者に重ねて考えることです。この考えを子どもの姿やご自身の教材研究を根拠として意見を述べる準備をしておくことが必要です。特にパネリストとなった場合、参会者の気持ちを汲み取ることも必要です。算数の内容論について話そうと思っても、その内容を聞きたい・話したいと思う参会者が会場にいるのか、会の趣旨は何なのか、参会者のニーズを把握しておくことも大切です。

また、協議会の前に全員で共通確認が必要な質問もあれば用意しておきましょう。ただし、気を付けなくてはならないのが協議会にならない質問にとどめることです。ここでの質問はあくまでも全員の共通認識をそろえることです。質問と協議会のすみ分けははっきりとさせておきましょう。

② 協議会中

協議会では、主に図4のように流れていきます。ここでは特に「協議したいことについての意見交流」をより深めるポイントを述べていきます。

意見交流の中でとにかく気を付けることは短く・端的にです。子どもたちの授業でもそうですが、国語で話す・聞く授業で指導するように

「結論から言いましょう」はこの協議会でも十

分適用されます。ただ、結論だけでは意見が深まりません。意見交流を深めるために必要となるのはやはり授業中に記録したメモです。「〇〇さんが～～とつぶやきました。きっとこのときこの活動がしなかったのではないかと思います。そこで指導案通りではなく、子どもの気持ちに寄り添って活動の3と4を入れ替えてもよかったのではないのでしょうか。」あくまでも例ですが、このように述べると、おそらく授業者も「確かにそうですね」と納得したり、「いや、この時は～～」と価値のある討論へ展開したりしそうですね。ただ、発表するだけではなく、出た意見に対し、対話できる協議会が授業者も参会者もわくわくするのではないかと思います。

また、私が気を付けていることとして授業を批判しないことです。「～～が余分だった」、「あの場面は子どもに任せるべきだった」というのは簡単です。人に教えるプロであるみなさんなら誰だってできます。大切なのはそうするために何ができるのかと代案を提示することです。「～～が余分だったので、あの時は教師がしゃべるのではなく、ペアトークの時間を取って子どもたちに理解を浸透させるべきだったのではないのでしょうか。」などと述べ、授業者のために、もっというと子どもたちのために建設的な協議会にしていきたいですね。

③ 協議会后

協議会に出て、様々な学びを身に付けることができました。しかし、このインプットした学びはどれくらい記憶として残るのでしょうか。諸説ありますが、インプットしたままの記憶ではたった5%しか記憶に残らないそうです。それでは、せっかくの学びがもったいないですね。協議会後のキーワードはアウトプットです。では、どんなアウトプットの間が考えられるでしょうか。図5では私が考えるアウトプットの間を示しています。みなさんにとってどれが一番しっくりきますか。

ちなみに私は同僚に話すことと授業を真似ることをよくしています。私がお世話になった先輩の先生にこんな方がいらっしゃいました。私が出張に行くたびに必ず「昨日の研究会はどうでしたか？」聞いてくださるのです。そして、私もその場で起きた事実をできるだけ再現度高く話をすると、「これについてはどう思いますか?」、「こんな質問は出なかったですか?」とさらに深まる質問をしていただいていた。このやり取りがあったからこそ、今の自分がいるのかなと思っています。参加していない先生はインプットに参加された先生はアウトプットと一度の研究授業が二度も三度も深まりますね。また、授業を真似ることについては、どんな些細なことでもいいです。問

協議会中

～流れ～

- ・ 授業者からの提案・協議したいことを確認
- ・ 全体に関わる質問
- ・ 協議したいことについての意見交流
- ・ フロアーから

図4：協議会の流れ

自分なりにアウトプットすることが大切

(例)

SNSに投稿する
同僚に話す
授業に活かす
授業を真似る
(提示の仕方・教材づくり・話し方・問い方)
文字に起こす
追試する など

図5：アウトプットの間

い方、話し方、しぐさでも学んだエッセンスを少しでも混ぜることでまた新しい授業像ができ、授業の幅が広がります。昔から真似るところから学ぶが始まったといわれています。はじめは上手くいかにも少しずつ自分のものにしていきましょう。それを積み重ねていくうちに唯一無二のオリジナルの教師が出来上がると考えています。

【第4章 終わりに】

授業についての講座や書籍、SNS は多く見られますが、意外と授業を見る側ってあまりないように感じています。（きっとそんなことはないのですが、私の情報不足です。おすすめの書籍等ありましたら教えてください！！）授業研究をするのあれば、授業者はもちろん、参会する私たちも「明日これやってみよう！！」、「授業をするのが楽しみになったな！！」と終わった後にはわくわくしながら家路に帰りたいものですよね。そんな授業研究会が一つでも二つでも増えればいいなと願っています。また、授業者としてみなさんに見ていただくのであれば一つでも二つでもみなさんのためになる“お土産”を授業の中でお渡しできれば思いながら考えています。みなさんにとって実りのある秋になりますように！！